

絵ってというのは
色が光に見えたらイメージが立ち上がってくるという
私たちが日常の中で
いろんなものを見ているときの感覚って
一体どういう感覚なんだろうっていう
その見るっていうことの、あるいは
そこにあるっていうことの確かさみたいなもの
あるいは不確かさみたいなものを
確かめていくことなんじゃないかっていう。
外は本当に桜が満開で
生の桜を見る方が絵に描かれた桜よりも
趣があっていいのかなと思うんですけども、
絵画の表現として桜がある意味を
私の初期の学生時代からの作品をたどりながら
受け止めていただけたらなと思います。

今、モニターの方に映っているのが、
大学の3年生から4年生のときに移る時に描いた作品で、
何の変哲もない石ころをかなり写實的に描いています。
当時、まだ絵のことは何もわからなくて
物があるってどういうことなのかっていうことを
確かめるところから始めました。
で、先生には石の上にも3年だから頑張れとかって言われながら
コツコツ描いてたんですけども、これも同じ頃の作品で
白いレンガを1個だけポンと描いてあるんですけども、
物があることによって
周りの空間とのかかわりっていうものが見えてきます。
で、これはちょうど大学の卒業制作なんですけれども、
私たちが日常生活をする中で、
いろんな情報があふれていたり、時間に追われてたりっていう
感覚から何か自分の場所をとどまって
見てみたいっていうそういう感覚だったと思うんですね。
こうやってすごく地味に静物画を描いていく中で、
椿 昇さんという

現代美術の作家の先生から

モランディとか見てみたらいいんじゃないかって紹介していただいて
ただその3次元のものを2次元に移し替えるだけが
絵を描くっていうのじゃないんだっていうことに
気づかされたっていうか、で、絵ってというのが一つの
独立した空間を作ることなんだっていうことに
気付かされたんですね。

まあ、ガラクタのようなものですけどね。

学校の隅の方に落ちているものを拾ってきて、
あまりその物が意味を語るっていうのを避けた、
それでただそこに物があることによって形成される
絵画空間を確かめている作品ですね。

これは大学院の修了時の作品で、
箱だとか、ポットだとかっていうものを
かなり写實的に描写するところから
色や形に還元されたような

で、一つずつは本当は自立した作品なんですけれども
組み合わせることによって、この時の私の中にある
そういう幅を表しているんだと思うんですけど。

いわゆる抽象絵画的な意識の方が強くなっているっていう
その振幅ですよ。

私たちは普段こう絵を見る時、騙されてるんですよ。

手前に重要な花瓶があって、後ろに壁がありますというふうに、
どうしても日常生活との関係で見ちゃうんですけど、

所詮それは1枚のキャンバスの上に
同じ絵の具が塗ってあるだけなんですよ。

ですから、影と瓶を描いている絵の具って
全く実は同じものなんですよ。

そうですね。で、物の存在と絵画的な空間と
せめぎ合わすような形で絵の具が
イメージを作り出していつているっていうのを
探りながら、絵を作っていくことの
楽しみみたいなものがすごく強かったし、
あとやっぱり自分の資質とか
自分が心地いい空間みたいなものっていうのを
掴もうとしたと思うんですけど。

で、どちらかというとその影だけが
色として出て、光が当たっている部分は
背景に同化していくような感じですよ。
要するに、絵ってというのは
色が光に見えたらイメージが立ち上がってくるっていう、
いい言葉ですね、それ。
感覚ってありますよね。
物質であるはずの絵の具が、ある時、
物質じゃない光に変わっているんですよ。
はい、そうですね。
どんどんこう抽象度が高くなってきて、
いよいよ最初の具象から抽象へという移行の形跡も
はっきりしてきたのですが。
そうですね、やっぱりどんどん、先程も言いましたけど、
自分の感覚がすーっと入り込める世界を
そう探っていくと、
どんどんその物よりも、物を取り巻く空間の方が
広がってきて
周りの人はみんな、そのうち何もなくなるんじゃないかって
心配して消滅傾向があって。
で、自分の中でどんどん、そういう自分の居心地のいい方に
スーッと寄り添っていってしまうと
なんか消極的な表現に陥ってしまうな、という感覚があって、
全く抽象的な空間を作っていこうっていう
最初の試みがこの作品なんですけれども。
抽象画っていうと
何でもありなんで、何からってというのがすごく難しいんですけども、
1色の絵の具の濃淡だけで
画面を作ることを試みたんですね。
油絵の具の特色としてなかなか乾かないんですね。
でその間、描いたり消したり、描いたり消したりを繰り返しながら、
自分の中で、なんでしょうね
できたと思える感覚って、口で説明するのは
難しいんですけども。で、紺色っていうのは
凄く闇の方にずっと沈んでいくような
奥行きを感じる色ですよ。

でも、絵の具を分厚く塗っていくと、
実在感を持って手前に迫って来たり。
色として見た時はずっと奥にいくんだけど
物として見たら手前に出てくることによって
図であったり、地であったり、そういう行き来が
起こりますよね。
ちょうど、そのそれが行ったり来たりする
状況ができた時に「あ、できたな」っていう
感覚になるんだと思うんですけど。
だから具象から抽象に移られた時に、
やっぱり私なんかはすごい度胸だなと思って。
それはなぜかというと、花があって、じゃあ花を写そうって
最初に真っ白のキャンバスに向かった時、
思って始めるのと
抽象だから、何にもテーマも対象もないけど
さあ好きなように絵の具塗ってちょうだい、って言われたら
何もなんか立ちすくんでしまって描けない
何でもいいですよって言われると
何にも出来ないですよ。
はい、はい。
真っ白なキャンバスに線を1本引いただけで、
それまでの白い何もない空間から
別の空間が生まれてくるんですね。
で、静物画を描いている時は、
目の前にある瓶だとかがモチーフだったのが、
その抽象になった時は
画面上で引かれた1本の線が絵を描くきっかけ
いわゆるモチーフになっていくっていう形になって始められるんですね。
例えば、木の幹の色は何色って言われたら
茶色って言ってしまいますけど、
実際は茶色っていう観念的な色ではないですよ。
で空は何色って言ったら、青っていう風に言えるんですけど、
じゃあどんな青なのっていう
そういう幅ってありますよね。
で画面よりもちょっと奥に見える色と
画面よりもちょっと手前に出てきて見える色、

あるいは画面よりずっと手前に出てきて見える色とかっていう
そういう色の見た時の
騙され方ですよ
イリュージョンですよ。
で、今までモノトーンで描いてたのが、
そういう色の視覚的効果っていうものを持ち込んで
そういう絵画的な空間を作るっていうので、
この後ろの作品は描いてます。
で、青っていう色は
凄く不思議な色で、少し緑味がかると
すーっと遠くに引っ込む青になるんですけども、
ほんの少し赤みがかかる、いわゆる紫がかると、
何かちょっと前に出てくるんですね。
そういうちょっと不思議なんですけど。
それと、緑っていう色も不思議な色なんですけど、
大体画面と同じぐらいのところを漂うような感覚があって。
まず、白いキャンバスに木炭で線を
何本か引いた上で、ちょっと紫がかかった青の濃淡で、
まず最初に空間を作っていくんですね。
で、その次に薄い明るいグレーを重ねているんですけども、
その上から緑の線を引くと、
今まで見えていたものと全然違う図が見えるんですね。
緑を上から引くことによって。
で、白い線はかなり絵の具の質感を作って
描くことによって別の形を切り出してる。
例えば、青いちょっと丸みのある形が3つ見えてきたりとか、
この線によって切り取られることによって、
こことこことここに3つの形が
できているんですけどね。
で、これは朝顔なんですけど、実は。
私が好きなのは
紫がかかった青い朝顔なんですけど、
垣根に緑色の葉っぱが面を作るようにして
垣根があると
ちょっと手前に面があるように出てくるんですね。
で、そこからその花がその葉っぱよりも少し手前に咲くんですね

そうすると、こう微妙な3次元的な奥行きと
色でもあるんだけど、
花にも見える瞬間であるとか、
色が作り出している空間と、それがその形として
意味を持つ際みたいなものですよね
そういう風なところで絵としては成立させていました。
で、これは絵巻物をモチーフにしているんですけど、
絵巻物は絵巻をくくっていくことで、
場面時間と空間がどんどん移行していきますよね。
で、一つの画廊空間に動きながら出会っていく。
現実にその見ている人の意識っていうものが
移っていくような感覚を
作品に持ち込みました。
今まで抽象的な線だったのが、
具体的な図を結んだ瞬間が出てくるんですけど、
これはルドベキアっていう花なんですけれども、
私がまた具象のイメージに入った最初の作品です。
抽象的な広がりを作るための線が、
ある一つの花っていう形を結ぶっていうところで作ってます。
実は、抽象に行く時より勇気がいったんです。
で、いったん具象描いちゃうと、あんまり怖いものがなくなって
どんどんこう積極的に描いていく訳ですけども。
今映っているのがポプラの葉っぱなんですけれども、
一つの筆をずっと置くと、
それが下の乾いてないグレーの絵の具と混ざって、
それがちょうど光を受けて
ちらちらする葉っぱに見えるっていう、そういう
こうイリュージョンを作り出して、私達が日常の中で
色んなものを見ている時の感覚って一体どういう感覚なんだろうっていう
見るということの、あるいはそこにあるっていうことの確かさみたいなもの、
あるいは、不確かさみたいなものを確かめると、
何を見ている見さされてるんだろうとか
何を見ているんだろうっていうことに
意識が向かうように、一つの層の中でイメージが立ち上がってくるような、
それを一筆一筆置く時の身体的な感覚と
私が例えば

散歩してて見る、見上げた時の葉っぱの感覚とを重ねていくっていう、
そういう感覚で描いているんですね。

で、この桜の場合も同じように、
描き方としては最初にピンク色の絵の具を塗って
で、側面にちょっと流れてるのが見えると思いますけど。
普通皆さん、絵は垂直に立てて描かれると思われるんですけど、
私の場合は、大体床に寝かせて、
で絵の具をかなりテレピンっていう揮発性の薄め液ですよ、で薄めて
しゃぶしゃぶの状態にして
流すように乗せるんですね。

で、それが揮発分が揮発せずに流動的な状態のところ
枝とか花を描いていくんです。

で、この作品の場合はピンク色の層を乾かしてから
薄くね、青い絵の具をすーっと乗せているんですね。
それが生乾きの時に、殆ど白に近いですけども、
グレーを乗せて
一気にやっぱりこれも花を描いてるんですね。

遠くから見たときに一瞬ぱあーっと桜だと思うんですけど、
近くで見ると、実は絵の具をくしゃくしゃってしてあるだけなんですよ。
ですから、近くで見ると、全然桜ではないんですよ。
そうですね。

で、桜は2年にまたがって描いてるんですけども
初めの頃はやっぱり桜に見えるように
克明に捉えているんですけども、
殆ど感覚的に捉えていくっていうことが強くなって
桜がある気配のようなものですよ。

桜の木の下に立った時の
空気感みたいなものの方がどんどん強くなって。
で、勿論、固有の桜の花のあり方っていうものも
あるんですけども、
一つ一つの花の正確さよりも存在に包まれてるような感覚であるとか、
全体の空気感みたいなもの、
あるいは存在の気配のようなものに
意識が向いていったんだと思うんですね。

だから、絵画を成立させる為のモチーフとしての桜っていうことから、
自分が生きている世界に対する目線というか、

まなざしっていうところに意識が移っていったのが、
この桜のシリーズの展開だったと思うんですね。
だから、自分でも実はびっくりしていて、
この桜久しぶりに見た時に。
こんなに大胆に描いたのかと思って。
かなりアブストラクトですよ、アップで見ると。
でも、桜に見えるっていう
確かさのような不確かさのようなものの感覚と
でもそれがただ絵の具を塗りたいだけだあって
受けとめるか、あるいは、
そこに桜の存在を受け止めるかっていう
見る人の意識もまた問うことができるのかなっていう風に思うんですね。
で、実際に桜を見る時の視線っていうのがありますよね。
例えば、普通、絵を見る時っていうのは、
目の正面に絵を掛けますけれども
ちょっと高いところに掛けることによって、
実際に咲いてる桜の花を見上げる時の視線と重ねる。
だから、自分が見てるものが何なのかっていうことを
意識してもらう為に視線を上げたり、
逆に、あちらは地面に落ちた花びらをモチーフに描いてるんですけども、
逆に見下ろすっていう
そういうことによって、例えば夜道を歩く時に
そういうところに目を向けて歩くっていうことを
引き起こしたいなっていう風に、
揺らぎを目線に揺れを作っているんですね。
で、それをちょうど柔らかく、
その桜を愛でるような感覚と重なるように
配置させていただきました。
やっぱり具象で展開していくと、
自然に対する私自身の見方も
どんどんやっぱり繊細になっていって
存在に対するまなざしが深くなっていくような感覚があって
ずっとホーマリズムを軸にしながら絵画を成立させるっていう
意識が強かったところが
本当に変えていかなければならないのは、
そういう表現の形式とかではなくて、

私達が生活していく、やっぱり生きていく中で、
美術とか絵画っていうものに可能性があるとしたら、
やっぱりそういう物の捉え方とか
物の見方っていうものを
確かめていくことなんじゃないかっていう
そういう風に思ってきたんですね。

※テロップで表示される所蔵先は、収録当時のものです。当館所蔵品以外の作品に関しては、現在は所蔵先が異なる場合がございます。